

## 授業レポート『主体的・対話的で深い学び』の授業実践を振り返って

〇〇高等学校 芸術・音楽 〇〇〇〇

### ① タブレットを用いた授業展開

楽譜作成ソフト「ミューズスコア3」を用いた、オリジナル CM ソングを創作する内容に挑戦した。200ページ近いマニュアルが示すように、使いこなそうとすれば相当な時間を費やすが、あえて教師側の細かい内容は省き、冒頭から各自で取り組ませた。まだまだ研究の余地はあるが、音楽理論に苦手意識を持った生徒でも感覚的・直感的に作業を進めやすく、生徒の主体的な活動を引き出す媒体になる可能性を感じた。

### ② 個とグループ活動のバランス

タブレットを一人一台用いることによってある種の責任感が生まれた。過去の創作は必ずグループ活動を取り入れていたが、人数や役割分担など悩み所が多かった。一人で作品とじっくり向き合う時間が増えた分、その後のグループ活動が想定していたものより有意義であった。ただ本クラスは12人と少人数であった為、全員にタブレットが行き届いたが、30人規模のクラスとなると全員のきめ細やかな指導の部分で改善・工夫の余地を感じる。

### ③ 評価のあり方について

特に A 評価（学習目標を十分に達成し、むしろ物足りなさを感じている生徒）と C 評価（きめ細やかな支援を必要とする生徒）への対応に重点をおくべきではないかと感じている。また、評価のあり方として、例えば学習を通しながらルーブリック評価を生徒と一緒に作りあげるなど、教師と生徒が評価の内容を共有していく場面も必要であると感じた。また、評価の場面は、題材の中で「主にここで」記録に残す場面を位置付けることが大切である。反対に考えれば、記録に残さない時は、実態を見取りながら、しっかりと支援を行うことに力を注ぐことが必要である。つまり「どの時間のどこで評価を記録に残すのか」を明確にすることが大切であると感じた。

### ④ 研究協議であがった意見の一部

参加者の意見…歌詞を先に考え、その後に旋律を付ける方法が一般的ではないか。私の回答…歌詞を先に作る手法も考えたが、今回は事前に「反復・変化・対照」の技法について学習した為、その後の CM ソングの創作方法については生徒の主体性に委ねた。本クラスは12人中11人が旋律を先に創り、1人が歌詞を先に創っている。前者の生徒は自分の創った旋律に歌詞を当てはめることで、言葉の抑揚に準じたメロディラインを創る場面を想定している。

### ⑤ 最後に

公開授業当日は中間発表の場面であったが、最初の発表者の番で、今まで一度も無かった機材のトラブルが起こってしまった。私が慌てて対処している最中、その生徒は予定していた発言が終了した後でも作品に対する自分の想いを語り、私を助けてくれた。60人を超える先生方の前で、とっさに取ったその生徒の言動や思いやりに感銘を受けた。まさに教師冥利に尽きる瞬間であった。